

[集めよ！ジュニア会員！！]

① 学生無料トライアル会員， そして，ジュニア会員へ

喜連川優 | 情報処理学会第27代会長／国立情報学研究所・東京大学

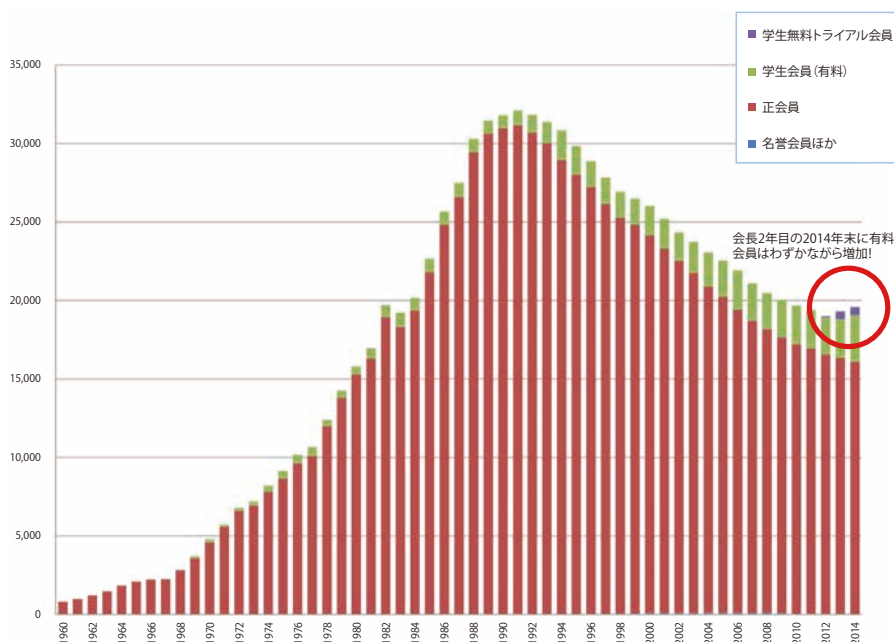
学生無料トライアル会員

2013年、小生が会長就任時には、当時の古川一夫前会長、西尾章治郎前副会長により、「学生無料トライアル会員」なる取り組みがなされていた。これは論文を書き始める前の学部学生に対して、無料でトライアル会員になってもらい本会のサービスを味見していただき、その後、有料の学生会員に転換していただくことを加速できないかという試みであった。西尾副会長は2013年度も副会長でおられ、小生も本取り組みを応援し継続的に推進した。何もない状況

で学生会員になることを募るよりも、いったん無料のトライアル会員になってもらえば、その後学生会員により自然にシフトしてもらえるのではないかという考えは非常に有効なアイデアであり、小生の任期中である2013年も2014年も強く推進し、その結果、2014年度の当初には無料トライアル会員を含めた会員数は増加に転じた。この会員はバーチャルであるというご批判もあったが、2015年度当初には、無料学生会員を含めない有料学生会員を含めた会員数ベースで会員数は増加に転じた(図-1)。このように学生無料トライアル会員から有料学生会員

への転換は大変効果的であったといえる。図に示すごとく、長らく会員減少が続いていた中で、微小ではあるものの回復したことはきわめてインプレッシブであった。

当時を振り返ると、いろいろと深い議論がなされたことを思い出す。その1つは、コストである。学生無料トライアル会員には学会が丹精込めて刊行している会誌を是が非でも送りたいという気持ちが底流にあるものの、紙媒体であったため、コストが高く、財政的制約からあまり学



■ 図-1 年度別会員数推移グラフ

生無料トライアル会員の規模を大きくするわけにも
いかないという課題があった。当時会誌はすでに電
子化はされていたものの、学生無料トライアル会員
は「拠点校」制度をとっており、一般の学生を対象
とするものではなかった。当時の学会の会員システ
ムはこの対象者を簡単に絞り込まず、デジタルを
諦め、紙媒体の配布となったようである。会員シス
テムの刷新は不可避であり、この案件以外でも不具
合が生じ、「こんなこともできないのは紺屋の白袴で
はないか」と、何度か議論をした記憶があるが、当
時の理事もなかなか良い解決策を見出せなかったと
記憶する。

新世代理事からの「学生無料会員無制 限化」の提案、そして、ジュニア会員

会長になって、最初に行った改革の1つに理事構
成の変更がある。変化の激しいITの動きが反映さ
れるためには、若い感性が学会の活動により的確に
反映されるべきである。一方で、学会員の平均年齢
は非常に高く、放っておくと、理事はどちらかとい
うと年配になり、強制的に若手枠を作るべしと考え
「やんちゃ」な新世代理事枠を導入した^{☆1}。会長就任
時の挨拶に記載したが、小生が本会創立50周年記
念全国大会を取りまとめた際、苦労して招いた女性
チューリング賞受賞者講演に比べ、後藤真孝先生の
企画した初音ミクとニコニコ動画の企画が圧倒的な
存在感を出していたことが忘れられない。空いた口
が塞がらない大きな驚きを感じつつ、これこそが若
手登用必須と考えた瞬間であった。会長任期1年目
に新しい理事枠を提案し、役員選挙を経て2年目に
最初の新世代理事としてその後藤真孝先生が就任さ
れ、活動が開始された。当時の様子は 後藤理事か
らの寄稿^{☆2}にあるが、多くの若手メンバを募り多様

な「やんちゃ」な議論をしていただき、学会をぐい
ぐいと牽引するアイデアをまとめていただい
た次第である。その中の1つとして、「学生無料
会員の無制限化」の提案があった。若手理事の感性
からもっと若い層に学会がアプローチすべきであ
るとの提言は誠に勇気づけられた。すなわち、大学
生(1, 2, 3年生)だけではなく、高校生や中学生、
さらには小学生、加えて、高専生や専門学校生まで
対象を広げ、それを「ジュニア会員」とし、会誌を
含め学会のコンテンツを「無料」で提供する方向に
ついての検討が進められた。企画政策委員会での議
論も経て、2014年11月の理事会に正式に「ジュニ
ア会員」の提案がなされた。このように、学生無料
トライアル会員の実施と並行して、ジュニア会員制
度の模索が2014年度中に開始されたのである。そ
の際の議論の焦点は、対象を拡大して人数に制限を
設けないためには紙媒体配布をやめることが必須で、
それをどう実現するかにあった。2015年1月の理事
会において、ジュニア会員制度導入、ならびに、そ
れに必要な本会の会員システムの改修を決定した。
そして、同年4月から紙媒体配布をやめ、情報学
広場上の情報処理学会電子図書館からダウンロード
するデジタルサービスに転換する形で試行段階の
実施をすることとなった。小生の会長任期後となる
が、その後の努力により会員システムの改修を終え
2016年度からジュニア会員制度は本格的に始動した。
ジュニア会員は当初約600人、現在はその3倍の規
模に成長したことを大変喜ばしく感じる次第である。

先に述べたように、何か新しいサービスを作ろう
とすると、本会のIT基盤の刷新・強化が不可避で
あった。小生が会長を務める期間では道半ばであり、
「IT基盤整備こそすべて!」と担当理事にハッパを
かけるにとどまった。言うのは簡単であるが、実
際には大変難儀である。なお、当時来日したIEEE
CSプレジデントもまったく同じことを訴えられて
おり意気投合したのを覚えている。今後、スマート
フォンへの軽やかな対応などその発展に期待したい。

^{☆1} <https://www.ipsj.or.jp/annai/aboutipsj/presidents/27kitsueregawa.html#20130606>

^{☆2} https://www.ipsj.or.jp/annai/aboutipsj/goto_masataka.html

ジュニア会員制度には、学会会員増強だけではない気持ちも

—若者への「信頼ある情報の発信」こそが 学会の役割の根幹—

当時、そして今も、学会の会員数が低迷しており、同様の学会は多い。皮肉にも、情報技術の進展により、容易に最新の情報が多様な媒体を介して得られるようになり、情報交換としての学会の場の価値が相対的に減少したことが大きな要因ともいえる。学生無料トライアル会員は、「学会会員増強」という発想から生まれたことは事実といえよう。会員が減少一途の学会よりも、会員が増える元気な学会を目指すことは当然であり、現時点においても、会員の増強はぜひ目指していただきたい。一方で、ジュニア会員を作りたいという中には、会長として別のこだわりを持っていた。

本会会長となった際に真剣に考えたことの1つが根源的な問い「学会の役割とは何か」である。情報技術は人類に大きな便益を与えてきたという光の側面が大きい半面、いわゆるネット社会に突入後、影の部分が無視できなくなったことは事実であろう。膨大な情報がやりとりされる情報社会は人類が初めて遭遇する世紀であり、玉石混交の情報津波の中で、最も大きな課題の1つは「一体何を信じればいいのか？」という本質的な問いにある。とりわけITは技術の進歩が著しく速いことから、ともすれば、表層上の動きに惑わされやすい側面もあり、経済的な視点、政治的視点からは独立に、「中立的に正確な情報学に関する新技術やITが生む課題の本質に関する解説」の発信こそが学会の担うべき最大の役割の1つと考えた。高校生や中学生にきっちりと分かりやすくITの本質を知らせるべきであろう。本稿執筆中に開催された第14回G20首脳会合／大阪サミットでは海洋プラスチックが大きな課題として取り上げられている。ITも同じ規模の不具合を生み出していないのか？ そんな問いかけを学会は真摯

に発信していくことが期待される。原点に立ち戻った議論を、とりわけ若手に向けてしていくべきと今でも感じている。

実は、小生が副会長時代にわずかに試みたことがある。近山隆理事（当時東大）ならびに大谷和子氏（日本総研）の多大なる努力により、Googleブック検索に関するクラスアクションに対して意見を発出した^{☆3}。複雑な内容でもあり、とりまとめには手間がかかったが、その意見はほかからも参照された。蓮舫議員の「世界で1番ではなく2番ではいけないか」発言に対してもスパコンの重要性に関する意見表出をした^{☆4}。佐藤三久理事（当時筑波大）と頭をひねり、1番を目指す気概こそ大切という凛とした態度を示した。ITから派生する諸問題は数多く、しかも、非常に手間と労力のかかる作業であるため、すべてに意見を発出することはできない。しかし、可能な範囲で対応することは大切である。読者はいつかの時点において、若者に分かりやすく発信しようとする学会、そして、そこで丁寧に問題を解きほぐす会員としての研究者の無償の努力や苦勞にトラストを感ずるようになるはずであり、そのとき、学会とのエンゲージメントが強くなると考えた次第である。

学生無料トライアル会員の取り組みがきっかけとなり、ジュニア会員制度が生まれた。これらの成果は当時の西尾章治郎、中田登志之、徳田英幸副会長や多くの理事の先生方ならびに、下間芳樹事務局局長を始めとする事務局の方々の努力の結晶である。これからの日本のITを支えてくれることが強く期待される若者を対象とするジュニア会員制度が今後ますます発展することを心より祈願する。

(2019年7月8日受付)

☆3 <https://www.ipsj.or.jp/01kyotsu/chosakuken/google.html>

☆4 <https://www.ipsj.or.jp/03somu/teigen/shiwake200911.html>

喜連川優（正会員）

1983年東大工学系研究科情報工学博士課程修了、工学博士。1984年より東京大学生産技術研究所に務める。現在教授。2012年より国立情報学研究所所長。本会第27代会長。